

との関係について親たちと考えるべきだと考えている。

以上の研究テーマとは異なるが、以前にまとめた『日本教育史年表』（伊ヶ崎暁生・松島栄一編、三省堂）が刊行された。わたしは1965年から1974年までを担当した。

過去の研究概況と現在の研究状況

山 本 秀 行

(1) 過去の研究概況

学部生の頃には、19世紀アメリカ文学、特にアメリカン・ルネッサンスというアメリカ文学史において最も華やかな時代の文学に興味を持ち研究していた。その中でも特にエドガー・アラン・ポウは、卒業論文でも取り扱い、学部時代の中心的な研究対象であった。

大学院では、研究対象を前々から興味があったアメリカ演劇に変えた。その中でも、特に20世紀の劇作家テネシー・ウィリアムズに焦点を絞り研究を進めた。修士論文は『テネシー・ウィリアムズのアンドロギュヌス神話創造－普遍性探究の自己劇化』（*Tennessee Williams' Making the Myth of Androgyne: Self-dramatization in Search of the Universal*）であった。その要旨を以下に簡単に記す。ウィリアムズは作品の中で自分自身の精神状況をその時々に応じて表現した。それにもかかわらず、それは単なる個人的な記録という段階に留まらず、普遍的な価値を持った文学作品となって読者（あるいは観客）の心に強く訴えかけてくる。いわば、ウィリアムズは創作活動を通して、自己劇化を行い、現代の神話を創造したのである。

(2) 現在の研究状況

現在、研究を進めている題材はウィリアムズの作品における精神分析学および精神療法の影響である。彼は精神分析学に興味を持ち、自分の精神的不安を癒すために、精神分析医の助言の下でいろいろな精神療法を受けていた。また、彼が知らないうちに最愛の姉ローズは前頭葉切除法（lobotomy）という、当時まだ実験段階にあった危険な手術を受けさせられ廃人同様になってしまった。このことは彼の精神的外傷（trauma）となって多くの作品の中に反映されている。彼の作品の中に潜むこのような精神的外傷を探ることは、彼の作品の本質に迫るための非常に有効な手段であると考えられる。

ウィリアムズの作品の中で精神分析学および精神療法の影響が最も顕著と考えられるものの一つに『叫び』（*Out Cry*）という劇がある。この作品と精神療法の一つであるサイコ・ドラマ（psychodrama）との間には多くの類似点を見い出すことができる。この両者が極めて類似しているということにどのような意味があるのだろうか。以前、このテーマについて口頭発表をしているが、今年はそれを加筆修正し論文として発表するつもりである。